

〈他者〉を楽しみ続ける子どもを育てる社会科授業とカリキュラム編成

社会科研究部

1 社会科における〈他者〉を楽しみ続ける子どもの姿

予測困難な社会と言われるように、わたしたちの周りにはたくさんの正解がない社会問題が存在する。新型コロナウイルス感染症によるパンデミックで言えば、その危機自体をわたしたちの多くが予想すらできなかった。そしてワクチン接種やオリンピック開催の是非などは、多様な立場、そして多様な意見の見方・考え方がぶつかり合い、そう簡単には正解が見出だせるものではなかった。このような社会に関わる課題について、重松（2022）は次のように描いている。

未曾有な出来事である COVID19 やその感染経路などでは何が事実か／何が妥当性の高い見解かが専門家でも確定できず不可知論的な諦めやシニシズムなどが入りこんできてしまう。また早わかりの理解にもとづく即レスの規範的／心情的な判断（解決策）の表明がなされる。それらの解決策でもたらされる社会的な排除についてやむえない／思考停止となる者も少なくない。（中略）私はひとまずかけがえのない内なる他者とともに思考しつづけるに着目している。視点（立場含む内なる他者）の矛盾対立拮抗（止揚不可能な関係）のなかでわからないことからわからないことへという連続的な思考の育成がこれまで以上に教室に必要だと考えるがゆえである。（pp.4-5）

ここには現代社会において生きる市民に関わる困難①「様々な社会問題に向き合うことを避けてしまうこと」困難②「様々な社会問題について問い続ける・考え続けることを避けてしまうこと」が描かれている。

本校社会科部では、以上のようなことに問題意識をもち、自分にとって異質で答えがないような社会的事象の本質や社会問題を〈他者〉と設定している（教材の〈他者〉）。そして、そのような〈他者〉との出会いも肯定的に捉え、社会のあり方や社会との関わり方について考え続け、問い続けながら、社会に向き合おうとする主体を育てることを目指して授業実践・カリキュラム開発に取り組んでいる。なお、本校では同じ教室の中でともに理解し合ったり議論し合ったりする相手を教室の〈他者〉と設定している。多様な人々の立場や多様な意見によって社会の仕組みや社会問題が語られる社会において、そして多様な人々との共生が求められる社会において、子どもが小さな社会としての教室で社会について向き合うことは重要だと考えている。以上のように、本校社会科部では、社会科において目指す〈他者〉を楽しみ続ける子どもについて、

具体的な姿とともに整理し実践に取り組んできた。

a〈他者〉に興味をもつ	自分が出合う社会問題や友だちの意見に興味をもっている・切実性を感じている。(どういうことだろう、これからどうなっていくのかな、わたしは・・・と考えるよ、友だちはどんな意見をもっているのかな)
b〈他者〉を深く知ろうとする	出合った社会問題に関わる見方や考え方に着目しながら、より追究しようとしている。(…についてくわしく調べたい、どんなことが論点になっているのかな、友だちはどんなことを大切にしたい意見なのかな)
c〈他者〉と自己を比べ、自己を深める	異質な考え、見方・考え方の価値について、自分の認識や意見にとっての意味や価値を考えようとしている。(別の視点・立場だとどう考えられるかな、どんなところが違う・同じなのかな、自分の意見はどんなことを大切にしたい意見なのかな)
d a-cを踏まえて自己を更新する	自分の認識や意見、その意味や価値について考え続ける・問い続けようとする。(分からなくなった・自分がかかっていた意見はどうだったかな・見直したい(内省)、もっとじっくり考えたい(新たな追究)、本当に…と言えるのかな(問い直し))

2 社会科における授業デザイン

先述した問題意識のもと、本校社会科部においては大きく2つの視点で授業デザインのあり方について研究を進めてきた。1つ目は、現代社会における困難①に関わり、子どもが〈他者〉に向かっていくことを目指して次のような授業デザインが必要になることを明らかにした。

授業デザインのあり方Ⅰ 子どもが〈他者〉に向かっていくこと

子どもが社会問題に興味や切実性を感じて出合える場づくり

- ① 自分がこれまで〇〇と思っていた社会的事象の事実が、資料をもとに再び考えると、「なぜ?」「どうして?」と社会的事象の真実を知りたくなるような課題とその提示
- ② 同じ社会的事象に対する評価が二項対立するような課題とその提示
- ③ 1つの社会的事象について多様な見方・考え方が複線化するような課題とその提示

また、現代社会における困難②に関わって、本校社会科部では、これまでの社会科授業やカリキュラムについて、①子どもに正解を求めさせてしまう社会科授業・カリキュラム、②子どもにとって聞きやすい(受け入れやすい)・目に見えやすい・解決の見通しが立ちやすい立場や視点を中心的に取り上げる社会科授業・カリキュラムを課題として捉え授業開発に取り組んできた。そして、その改善の方策として論争問題学習に取り組むとともに、以下のような授業デザインの視点をもって授業の開発・改善にあたっている。

授業デザインのあり方Ⅱ 子どもが〈他者〉について内省的に問い考え続けること

論争問題学習の設定 「分かるようで分からない」「～だけど、～じゃない」「…さんはどう考えたのかな」「…さんとの意見の違いはなぜ起こるのか」といった状況を生み出

す。また、社会に関わって構築主義認識論を子どもと共有する。

- ① 複数回の意思決定の場を設けること
- ② 子どもには見えづらい立場や視点を取り上げること
- ③ 自分の認識の可視化場面を設定すること

最後にこれらに加えて、子どもの感情への配慮を重要な授業デザインの視点として挙げたい。本研究では〈他者〉に向き合う子どもの情動を対象にしたものである。「答えが出ない」「もやもやする」といった自分の否定的な感情にも向き合うことを敢えて大切にしている。子どもがそのような否定的な感情も肯定的な感情も、教室の仲間や教師に表出し、共有できるような心理的安全性を保障することが重要である。

3 社会科におけるカリキュラムの編成

以上のような授業デザインの視点に基づき、本校社会科部では、〈他者〉を楽しみ続ける子どもを育てる社会科カリキュラムの編成原理として次のような点を見出し取り組んでいる。

社会科カリキュラム編成のあり方

- ① 論争問題を繰り返し取り上げること
- ② 「社会・経済」「環境・文化」「健康・安全」「国際」のスコープをもとに第3学年から第6学年の学習内容を配列すること
- ③ 子どもには見えづらい（主流の語り・説明から排除されがちな）様々な立場や視点を繰り返し取り上げること
- ④ 子どもの発達を考慮しながら論争問題の取上げ方を工夫すること
問題のステークホルダーの立場に立って ⇔ 子どもの立場として ⇔ 問題を調停する立場として

カリキュラム編成のあり方②については、長川（2022）による社会問題が生じるレトリックに着目し開発したスコープをもとに学習内容を配列したものである。また、子どもには見えづらい（主要の語り・説明から排除されがちな）様々な立場や視点は別表として各学年で整理してきた（カリキュラム編成のあり方③）。

（文責 野元 祥太郎）

引用参考文献

- ・重松克也（2020）「決めかねる思考の育成」坂井俊樹・編『<社会的排除>に向き合う授業』新泉社、104-105.
- ・長川智彦（2022）「小学校社会科における実在問題としての「社会問題」の内容編成ー領域と配列の設定に着目したカリキュラムの構築を目指してー」『社会認識教育学研究』37 巻、pp.21-30.